

商店街が面白い

雪のオブジェやキャンドル

開 催中の「第19回小樽雪あかりの路」(12日まで、実行委主催)に合わせ、小樽市内の商店街は多くの人を呼び込もうと、雪のオブジェやアイスキャンドルを並べるなどして彩りを添えている。最後の週末に合わせた催しも行われる。(長峯亮)

小樽都通商店街では、約300個の長さのアーケードに赤や黄色に色付けしたアイスキャンドル約300個を設置した。アーケードの両端の入り口ではハートの形にしている。週末の11、12両日午後1時から、小樽商科大の地域活性化サークル「小樽笑店」が同商店街事務所前でゲームイベントを開く。氷で作った豆を使用したエアホッケーや、昨年好評だった氷のストーンを使うカー

氷使いゲームも

きょう、あす リングを行う。同サークルの1年湊森平さん(19)は「外は寒いけど、体を動かして遊び、暖まってほしい」と話している。参加無料。午後5時まで。一方、小樽堺町通り商店街のメルヘン交差点では昨年に続き、「メルヘン動物の森」と題し、フクロウやウサギの形をした雪のオブジェ約30個が並んでいる。ほのかな光りが周囲を照らし、観光客の写真撮影スポットとなっている。小樽梁川通り商店街では、ろうそくが入ったステンドグラスのランプ約70個を通り沿いに設置している。

17雪あかりの路



多くの観光客が訪れるメルヘン交差点をほのかに照らす。フクロウやウサギをかたどった雪のオブジェ

小樽大の井上典子教授の英文学ゼミで学生らが制作していた旧手宮線周辺の英語マップが完成した。学生らは10日、小樽雪あかりの路の見物などに訪れた外国人観光客に「小樽の散策に役立てて」と手渡した。

英語マップは文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」の一環として昨年5月から制作を始めた。留学生7人を含む13人が参加し、「外国人目線」を意識しながら旧手宮線周辺の飲食店や文化施設などの見どころを紹介した。マップ上のQRコードを読み取ると、旧手宮線を走る蒸気機関車の古い映像や、国の重要文化財に指定されている旧手宮鉄道施設を動画で見られるサービスもある。

旧手宮線周辺 英語マップ完成



外国人観光客に英語マップを手渡す井上典子教授(中央)と学生

樽商大生制作 外国人客に配布

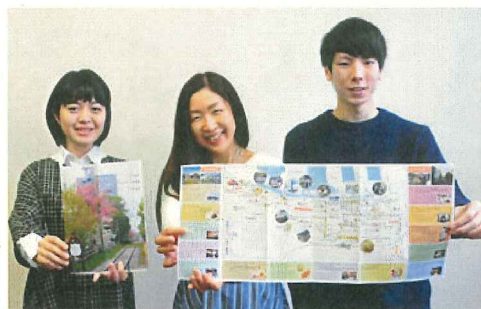
わづ小樽運河の周辺などでマップを配った。「地元の人や札幌の観光客内所て近人の好きなお店も載っている。配布する予定。」などPRした。マ(市村信子)

(市村信子)

旧手宮線周辺マップ完成！商大・地(知)の拠点整備事業 (2017/02/10)

ツイート

小樽商科大学(緑3)は、文部科学省「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」の一環で、同大言語センター・井上典子教授と留学生7名・日本人学生6名が、「旧国鉄手宮線で巡る外国人観光客のための小樽散策マップ作成」のプロジェクトチームを作り、このほどマップが完成。2月10日(金)に納品を済ませた。同時に15:00から、JR小樽駅周辺や小樽市観光物産プラザ、雪あかり会場などで観光客へ配布。観光案内所等へも配置した。



これまで旧手宮線周辺に特化した観光ガイドマップが作成された例がなく、期待が集まった。マップは、定型外の6項6つ折で、COC事業で1,000部発行。同センターから6,500部を増刷した。

旧手宮線の遊歩道の整備完了に合わせて、手宮線を小樽の観光資源として発信する絶好のチャンスと考え、昨年5月に同プロジェクトを開始。中国やイギリス、フランスからの留学生と日本の学生が知恵を出し合い、外国人観光客へ行ったニーズアンケート100名分を参考に、もっと外国人に手宮方面を散策して

もらい、博物館などを巡ってもらい経済効果に繋げようと制作した。

小樽や日本の文化を知らない留学生が加わることで、アイデアやグローバルな視点を取り入れ、穴場的な店舗を盛り込み、アジア圏の人にも理解できるシンプルな英語を使ったマップが出来上がった。

店舗によってはカードが利用できないこと、両替できる銀行などを、留学生の意見で知り得たことをメモに記載している。

マップで説明しきれないことは新たに動画を制作し、QRコードで読み取り確認できるのが、これまで手がけたものとの大きな違い。手宮線を列車が走る古い映像や主なイベント、小樽市総合博物館本館と運河館の紹介の3つのパターンがある。



表紙には、アマチュア写真家・眞柄利香さんが、旧手宮線に桜が咲く頃撮影した写真を採用。小樽市産業港湾部観光振興室や小樽市教育委員会の協力も得た。

リーダーの丹生谷果歩さん(21)は、「レイアウトも自分達で行い、伝えたい内容を盛り込んだ。マップを見て散策を楽しみ、表紙の方は、小樽のイベントや手宮線付近の美術館や博物館、手宮線の歴史を掲載した。じっくり読んでもらいたい」と話す。

井上教授は、「これまで制作したパンフレットやマップを手にしている観光客を見かけると、達成感を感じ嬉しくなる。外国人が行ってみたいくなる情報を盛り込み、日本人学生と留学生との協力で良いものが完成した」と期待を寄せた。

[◎平成28年度地域志向型教育・研究プロジェクト一覧](#)

[◎関連記事1](#) [◎関連記事2](#) [◎関連記事3](#)

北前船の価値再発見

小樽観光客ら参加し歴史浪漫

【小樽】小樽の発展を支えた北前船の歴史的价值を再発見する催し「雪あかりの歴史浪漫」(実行委主催)が11日、小樽市色内2の運河プラザで開かれた。

街をろうそくの灯で照らす「小樽雪あかりの路」(3〜12日)に合わせて歴史を学ぼうと初めて開催した。札幌からのバスツアーで訪

れた観光客ら約80人が参加。樽商大の高野宏康学術研究員が進行役を務め、市総合博物館元館長で北海道北前船調査会を主宰する土屋周二さんが解説した。

北前船は江戸〜明治期に日本海の手運で活躍した。土屋さんは、蝦夷地から北海道と名前の変わった1869年(明治2年)は道内の人口が6万人弱で、その約30年後には100万人を超えたことに触れ、「北前船は開拓者の生活物資を運んだため、船



北前船が小樽にもたらした歴史的价值を解説した「雪あかりの歴史浪漫」

主が一番稼いだのが明治期だった」と語った。

北前船の船主を先祖に持つ札幌在住のチェンバロ奏者、明楽みゆきさんが北前

船と同時代のバロック音楽などを演奏し、参加者は当時に思いをはせていた。

(西出真一朗)